

急性肝炎2例, 胆嚢摘除後状態1例であった。(4) 血液クリアランス曲線はコントロール例と胆道閉塞性疾患例とで著明な差異が認められた。(5) 正常例の心プール・肝・胆嚢・腸管に, RIOを設定し, ヒストグラムを得た。ヒストグラムの pattern からの疾患の診断の可能性を強調した。

32. 肝・胆道シンチグラフィーによる心および肝ヒストグラムの検討

児玉 行弘	仙田 宏平	佐々木常雄
三島 厚	松原 一仁	小林 英敏
改井 修	真下 伸一	石口 恒男
大鹿 智	大野 晶子	(名大・放)

肝・胆道シンチグラフィー用製剤である ^{99m}Tc -diethyl-IDA の肝機能診断への有用性を, 心臓および肝臓のヒストグラムについて検討した。対象は各種肝・胆道疾患32例で, シンチパック200を有する Pho/gamma LFOV を使用し, 静注直後から60分間の心および肝ヒストグラムを作成した。

心ヒストグラム第2相即ち末梢残留曲線の半減時間 $H \cdot T_{1/2}$ と, 肝ヒストグラムの30分に対する60分の波高比 $L \cdot H_{60}/H_{30}$ とは有意に相関した。また, $HT_{1/2}$ は ALP および $T \cdot B$ とそれぞれ有意に相関した。 $L \cdot H_{60}/H_{30}$ も ALP および $T \cdot B$ とそれぞれ有意に相関した。さらに, 肝ヒストグラムのピーク時間 $L \cdot T_{\max}$ は LDH と有意に相関した。一方, 肝排泄曲線の半減時間 $U \cdot T_{1/2}$ もまた ALP と有意によく相関した。他方, 肝摂取率 k 値は, 肝機能正常者例で, 平均 0.253, 標準偏差 0.051 であり, 肝機能異常群と比べ明らかに高値を示した。

以上のごとく, 本検査の成績は, $T \cdot B$, ALP, LDH とよい相関を示し, 肝機能診断に有用である結果を得た。

一方, ^{99m}Tc -diethyl-IDA の肝摂取率は, ^{131}I -RB や BSP のそれと比べて2倍以上の値を示し, 本製剤の肝への移行速度が, ヨード製剤のそれと比べ速いことを意味すると考えた。従って, 本製剤は, ヨード製剤によるアイソトープ肝機能検査と比較し短時間で施行できる長所があると思われる。

これらの点については, 症例を重ねさらに検討したい。

33. 抗 AFP 抗体産生が疑われた Hepatoma の2例

鶴田 初男	松尾 定雄	金森 勇雄
木村 得次	市川 秀男	樋口ちづ子
		(大垣市民 特放)
中野 哲	北村 公男	綿引 元
武田 功		(同・2内)
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

AFP は免疫学的には通常, 抗体は産生し得ないと考えられているが, 今回 AFP 産生 Hepatoma の2例で PEG 分離法において B/T で20%以上と高い非特異的結合率 (NSB) を示す血清が見つかったので, Insulin 治療者が抗 Insulin 抗体を産生した例との対比により, この2例が抗 AFP 抗体を産生した可能性を検討した。その結果を次に示す。

1) PEG 法および二抗体法で, kit 中の抗体以外に標識 AFP を結合する蛋白が存在する現象がみられた。

2) これらの血清に標準 AFP を添加し, 標識 AFP の結合抑制をみたが, 有意な変動はなかった。このことから抗原性が, わずかながら異なったものに対しての抗体ということも考えられる。

3) Insulin 治療者の血清が標識 Insulin を取り込む現象は, 抗体を産生したという裏付けになることは良く知られていることである。今回検討した内では, この2例は Insulin, T4 では NSB の上昇は認められず, AFP のみに上昇していることから, 抗 Insulin 抗体と比べて力価は低いが, 抗 AFP 抗体であることが強く疑われた。